

今年度、最初の集会にあたり、2つのことを話したい。

第8話（1年生には第1話） 「放任すれども、放置せず」

1年生には、入学式で話した。私の造語。「生徒を放任するが、放置はしない」という本校の原則を表す。放任の「任」は任せる。皆さんを信じて、自由に任せる。

しかし、放置はしない。「放置はしない」ということに、二つの意味がある。

一つは、自由の中で、どうしたらいいかわからず悩む者を、放っておかないという意味。

なので、悩みや不安等があれば、遠慮なく相談してほしい。SOSを出してほしい。

もう一つは、人の自由を害する行為は許さない、厳正に対応する、という意味。

「自由とは他者を害しないすべてをなすこと」と、「フランス人権宣言」第4条に「自由」が定義されている。他者を害する行為の典型は、いじめ。いじめを受けたり、見たり聞いたりしたときは、そのままにしておかず、先生に伝えたり、アンケートで回答するなどしてほしい。

お互いの自由を尊重しながら、自由と自由をうまく調整しながら、居心地の良い集団を作っていこう。

第9話（1年生には第2話） 「みかたを増やせ」

皆さんは、「群盲、象を評す」という寓話を知っているか？「群盲」の「群」は群れ。「盲」は、盲点の盲。

目が見えない人が大勢で、象とはどんなものか、評論している。それが、「群盲、象を評す」。

ある人は象とはベトベトしたものだ、ある人は象とはザラザラしたものだ、ある人は象とはチクチクしたものだ、と、てんでバラバラな主張をする。ベトベトした鼻先を触っている者は、「何がザラザラだ、感覚がおかしいんじゃないか」。ザラザラした胴体を触っている者は、「ベトベトとか、ツルツルとか、的外れだ。私は、実際に体験して言っている」。象の牙の先端を触っている者は、「尖っていて、チクチク痛い、それが象だ。私は何十年も触って、よく知っている」等々。口論はエスカレートし、収拾がつかなくなった、という寓話。

これは、目が見えない人を揶揄した話ではない。ものの見方が狭い人を戒めた話。

象には、ベトベトしたところ、ザラザラしたところ、チクチクしたところ、一見矛盾するいろいろな部分がある。ものごと人間も複雑で、様々な側面を持っている。だから、ものごとや人について論ずるとき、たまたま触れた一部分でもって、全体を評価してはいないか、他者の見方をよく考えずに切り捨てていないか、自戒したい。自分の見方と、正反対の他者の見方が両立し得ないか、俯瞰的に考えたい。

今の時代、「フィルターバブル」「シリコンのカーテン」「エコーチェンバー」で、同じような見方ばかりに触れて、狭く、排他的になる危険性が高くなっている。SNSやオンラインゲームなどで人と広く「つながっている」のではなく、狭く「つながれている」だけかもしれない。友達が多い、フォロワーが多いなどと言っても、象の、同じところを大勢で触っているだけかもしれない。そういう人は、もろいし、危うい。

逆に、たとえ一人であっても、いろんな見方・考え方ができる人は、強い。決して、頭数ではない。見方(perspective)は、味方(ally)に通ず。多面的なものの「見方」こそ、自分の強力な「味方」になってくれる。

幸い、本校には、個性的な人・変わった人が大勢いる。クラスや学年、中高の枠を超え、多様な見方・考え方に触れて二つの意味での「みかた」を増やしてほしい。

また、様々な教科を学ぶのも、ものの見方・考え方を増やすため。それぞれの教科には、それぞれ特有の見方・考え方がある。また、総合の時間は、各教科のものの見方・考え方を総合的に働かせて、ものごとを究めていく時間だ。苦手な教科もあると思うが、そこがあなたの死角、あなたが触っていない象の部位。苦手教科も捨てずに鍛え、「みかた」を増やしてほしい。